

瀧谷山報

通巻178号
[令和5年4月発行]

【今後の当山行事予定】

春季大祭 5月28日(日)



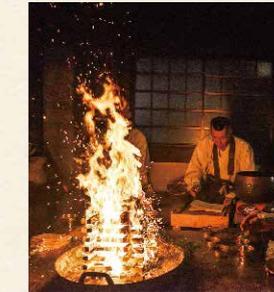
●御本尊御開扉
大護摩供
【本堂】
〈午前〉6時・10時・
11時30分
〈午後〉1時30分・3時



●大般若経転読付
大護摩供
【本堂】
午前11時30分



●柴燈大護摩供
【境内】
●午前12時頃開始
●午後1時頃点火



●瀧不動堂護摩供
(毎月28日)
【瀧不動堂】
午前9時頃～午後2時頃
(時刻は瀧不動堂山伏に
直接お尋ねください)

観世音夏まつり 7月9日(日)

- 施餓鬼法要
午後1時 予定
- 福引
午前10時頃～
午後3時頃 予定
(お申し込みは6月ごろ
よりご案内いたします)



地藏盆 8月24日(木)

- 地藏盆会法要
午後3時30分 予定



※行事予定は変更になる場合があります。詳しくは瀧谷山公式ホームページなどで随時ご案内いたしますので、ご確認ください。

■日々のお護摩祈祷

- 平 日…〈午前〉7時・10時・11時30分
- 土・日・祝…〈午前〉7時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時
- 毎月28日…〈午前〉6時・10時・11時30分
〈午後〉1時30分・3時
- 仏具磨きの日…午前7時

■交通安全祈願

午前9時より午後4時までの毎時0分・30分(30分毎)
(毎月28日は交通安全祈願のお勤めはございません。)

■仏具磨きの日のお知らせ

- 4月25日(火) ●5月25日(木) ●6月26日(月)
 - 7月25日(火) ●8月25日(金)
- 上記の日のお護摩祈祷は朝7時だけです。

令和5年4月発行
通巻178号

●発行所：瀧谷不動明王寺
〒584-0058 富田林市彼方1762 電話 0721-34-0028 振替 00930-5-17704
●発行人：荒谷純光 ●編集人：津田貴司



東大阪の住宅街にひとときわ目を引く記念館が建つ。この地に居を構えて旺盛な著作活動をした司馬遼太郎ゆかりの記念館である。司馬当人も著名だが、設計もまた高名な在阪建築家の手によるため、より世に知られる記念館となった。新聞記者から歴史小説家に転身した司馬遼太郎の作品群は、今も多くの読者を得て、話題性は尽きない。

四十年前も前に求めた雑誌には作家たちの書齋ばかりを撮影した特集があった。作家たちの本丸、執筆の現場たる風景は興味深い。その一つに司馬遼太郎の書齋も選ばれていた。無類の書籍蒐集で知られる彼の書架は、そのまま雑誌の見開き一面を飾る。フレームに納まりきらない迫力ある書籍の壁が見事に一枚の写真に仕上がっている。とりわけ着目したのは、壁の中央付近に仏教関係、それも真言宗に関する専門書がずらりと収められた箇所。それは遙かに一個人のレベルを超えて、大学など専門機関が有する図書館の域に近い。この雑誌掲載以前、相当の年月を要して司馬はあるテーマに傾注していた。それはやがて『空海の風景』の題名

司馬はいう「空海が生存した時代の事情、その身边、その思想などといったものに外光を当ててその起伏を浮かびあがらせ、筆者自身のための風景にしてゆくにつれてあるいは空海という実体に遇会できはしないかと期待した。この作品は、その意味では筆者自身の期待を綴って行くその過程を書きしるしただけのものであり、書きつつもあるいはついに空海にはめぐりあえぬのではないかと思ったりした。もし空海の衣のひるがえりのようなものでもわずかに瞥見できればそこで筆を擱こうと思った」と述懐して大師の傑出した存在感を是認している。

密教の正統を継承された弘法大師は、わが日本の精神文化そのものの形成と進展に多大な影響を与えたことは論を俟たない。そのお大師さまがご誕生されてから一千二百五十年、今年がこれに正当する。ここ瀧谷山を始めとする弘法大師ご開創の霊地、真言宗の教えを掲げる全国津々浦々の寺々は、挙って報恩謝徳の祈りを捧げ続けている。ご誕生慶祝の今こそ、ご信徒の方々も祈りを一層深め、司馬が求めたように仏教という風景にとけ込む好機とお薦

で発表され、その記述内容を巡っては仏教界に論争をも生んだ。弘法大師空海御入定一千二百五十年を間近に控え、世に弘法大師への関心を高める契機となった作品でもある。

あの書齋の風景を記憶に留めながら記念館を訪ねた折にまず感じたのは、「ほんとうにあの本は在るのか」という問い。記念館は膨大な蔵書類を保管するための図書館であり、司馬の精神を体現させた芸術作品にもみえる。地上から三層吹き抜けに造作された大書架は圧巻の一語に尽きる。書架全体を俯瞰できる場所に立ち「あの書齋の風景」を見つげようと凝視した。じつと多彩な背表紙の海を見つめ続けるうちに、浮かび上がるように弘法大師や真言密教の一群が目に入った。ほぼ記憶通りの配列でそれらはかつての書齋から移動されていた。見る者を呑み込まんばかりの典籍の圧倒さと弘法大師に迫ろうと試みた司馬の繊細な息づかいが、その時に重なった。

弘法大師を稀代の天才と称した評伝は数多く、司馬も大師に魅了された一人であろう。「空海の風景・あとがき」でめをしたい。その営みは衆生済度というお大師さまが示されたご誓願に帰趨する浄行でもあるに相違ない。

これもずいぶんと昔のこと、ご恩のある方から小料理屋にお誘いいただいた。なかなか雰囲気のある店で、壁に味わい深き一幅の墨書が掲額されていた。「桃唇向陽開」と横書きしたのは司馬遼太郎ご本人、酔客の文人たちとの語らいのままに認めたかの如き軽妙な筆致。盃を片手に弘法大師論を熱弁する姿が思い浮かぶかのような五文字であった。

今春の桜も花を咲かせた。願わくば小さくとも私たちが己の花を咲かせたい。お大師さまの佳年という得難き年に添い願いながら、陽に向かって開く花々を夢想したら、久しぶりにあの店の暖簾をくぐりたくなった。

(文中敬称略)

参照 『空海の風景 上下巻』は中央公論社より

昭和五十年に初版刊行された。

春季大祭 五月二十八日(日)

大般若経読付大護摩供 柴燈大護摩供 厳修



柴燈大護摩供とは…

山中で採った柴に火を灯し、その火中に不動明王を招いて人々の平安を祈る、修験道の儀礼です。一説によると宇多天皇の寛平二年(890年、平安時代前期)日吉大社においてはじめて勤められたものが起源といわれます。修験道は世俗から切り離された清浄な山中を仏そのものと考え修行に勤めます。柴燈大護摩供では、山伏問答や宝弓の儀・宝剣の儀など古式ゆかしい作法が勤められたのち、ヒバで覆われた護摩壇に火を放ち、天をも焦がすほどの炎の中に数万本にも及ぶ護摩木を投じて、祈りを込めてお焚きいたします。



大般若転読とは…

六百巻に及ぶ『大般若経』を大勢の僧侶が読誦します。その際、蛇腹折りになった経本を大きく宙に広げ、高い位置から頁を一気に繰り落とすようにする所作が目を引き、このとき生じる風を受けると長寿になる、厄除けになるともいわれています。また読み終えた経本を机に叩きつけるようにする大きな音も特徴的で、非常に勇壮な読経であり、普段にもましてダイナミックで荘厳な護摩供であると言えるでしょう。



縁日の境内周辺案内

令和4年5月より、毎月28日の交通規制が解除され、車両通行ができるようになりました。それにともない縁日の露店は瀧谷山駐車場にあつまって出店しています。また春季大祭の山伏のお練り行列は山上駐車場を出発点として山内を練り歩き、山門より境内に入ることとなりました。

- 御本尊御開帳大護摩供
【本堂】…午前六時
 - 大般若経転読付大護摩供
【本堂】…午前十一時三十分
 - 柴燈大護摩供
【境内】…正午頃開始 午後二時頃点火
 - ◎ 護摩木…一本三〇〇円
(一本よりお申し込みいただけます。)
- 令和五年五月二十八日(日)、瀧谷不動尊では、年間最大の行事である春季大祭をお勤めいたします。本堂にて十一時半より、組寺寺院方ご出仕のもと大般若転読付護摩供が盛大に勤められます。また境内にて正午頃より、百名のぼる大峯山修験者によって柴燈大護摩供が古式に則り厳修されます。本堂での護摩祈禱ならびに柴燈大護摩供では、身体健全・商売繁盛・家内安全・災難消除・眼病平癒等、御信徒皆様の所願成就をご祈念いたします。
- 当日はぜひ本堂での大般若転読付護摩供にてご祈願いただき、柴燈大護摩供にもお参りされますよう、あわせてご案内申し上げます。

観世音夏まつり

七月九日(日)



令和五年七月九日(日)、瀧谷不動尊では、故人を偲びお祈りいただく行事として「観世音夏まつり」をお勤めいたします。

瀧谷不動尊では年に一度の廻向の行事である観世音夏まつり。当日のお勤めでは、お申し込みいただいた精霊それぞれにお塔婆をお作りし、法要当日はお戒名を一体一体読み上げて、皆様のご先祖様やご縁故の方々の御廻向申し上げます。

蒸し暑い季節につき、新たな客殿の講堂にてお勤めいたしますので、過ごしやすくお詣りしていただけます。廻向申し込みの方には恒例の福引がございます。また去年より再開しました清興(落語)も引き続き開催の方向で準備を整えてまいります。どうぞお楽しみにご参詣ください。

※一昨年より、多くの方にお参り頂きやすいよう、観世音夏まつりの日程を七月の第二日曜日に変更いたしました。どうかお間違いのないよう、お誘い合わせの上お参りください。

観世音夏まつりについての詳細、お申込用紙は、どうぞお気軽に寺務所までおたずねください。

● 観世音夏まつり

【客殿大広間】：午後一時

◎ 廻向料：五〇〇〇円

(廻向は五体まで。追加一体につき一〇〇〇円)



廻向とは……

亡くなった方はこの世で功德を積むことが出来ません。そこで、生きている私たちが亡くなった方の代わりに、お坊さんにお経をあげてもらったり、仏様にさまざまな供物をお供えしたり、毎日に感謝して手を合わせる心を持ち善い行いをして、それらの功德をご先祖様に廻し向け、福德を受けてもらうことを廻向と申します。



「貪りの心①」

この山報では毎々、仏教のさまざまなお話を紹介するにつけ、「やれ煩惱が、やれ貪りが」などと小難しく申しておりますが、これらの事柄について人様に分かりやすくお伝えするのは、なかなか難しいことだなあと日々感じております。

その「貪り」についてのお話を二回に分けてお送りします。今回は第一話。

さて、仏教といえば、その象徴的な花として蓮をイメージされる方は多いと思います。

蓮という花は、泥中に生じ、泥中にありながら、なお清らかな花として、煩惱などの悪しきけがれに染まることのない、仏さまの高潔な慈悲や智慧と結びつくと考えられ、しばしばモチーフとして登場します。

まさに、仏さまの持つ「真の性質」とは、蓮が泥中にありながら汚れぬように、愚かさや無知などの悪い心になまなま、影響されることはないと考えられます。そして、私たち仏さまを信じる人々の心にも、本当はそうした性質が眠っているとされます。ですから、実は、心がけや気づき一つで、仏

さまのように、清らかな心の境地に至れるものと信じられています。

蓮は、実はこのようにとても奥深い意味を持つお花でもあるのです。

この「蓮の花」と煩惱のひとつである「貪り」に関連して、以下のようなたとえ話があります。

「あたかも、泥に生じた蓮華が、咲き誇っている間に見る人の心を喜ばせるのに対し、枯れて、腐りはじめてからは喜びも無く、心地悪しきものとなる。貪りによって得られる喜びも、それと同じ様である」
〔宝性論〕

咲いた花は美しく、見ている私たちの心を癒し、くらしを明るくしてくれます。これは多くの人の賛同するところでしょう。ところが時間が経って、枯れて、色が変わり、いやな臭いなどとしてこようなものなら、そのような良い気持ちよりも、嫌だなという思いが勝り、もう処分してしまおう、などと考えたりするでしょう。あるいは、ずっと綺麗のまま咲いていてくれたらいいのにと考えるかもしれません。

貪りによって得られることの顛末とはまさにこれと同じであると説かれています。どうでしょうか？

続きはまた次号にてお話しいたします。

◆交通のご案内

昨年より毎月二十八日の車両通行止め(府道森屋狭山線の近鉄滝谷不動駅から山門までの区間)が解除され、二十八日もお車でご来山いただけるようになりました。歩行者天国はなくなり、昔ながらの風情がなくなつて寂しいとお声も聞きますが、一方で近年は坂道がしんどい、車で参詣したいという方も多く、時代の変化とともに徒歩の方も少なくなつておりました。どうかご理解くださいますようお願いいたします。

当山では参詣者用駐車場をご用意しております。二十八日はスロープを上った山の上の駐車場をご利用ください。第一駐車場には、車椅子をご利用の方やお身体の不自由な方の専用スペースを設けております。どうぞご利用ください。

富田林駅からバスもご利用いただけます。バスは二十八日のみ、午前八時から午後三時台まで一時間に二本程度運行しています。またタクシーは富田林駅、河内長野駅、南海高野線金剛駅よりご利用いただけます。詳細は各交通機関までお問い合わせください。

徒歩でお越しの方は、どうか車に気をつけてお参りくださいませ。

※縁日屋台に関するお問い合わせは当山ではお受けできません。ご了承ください。

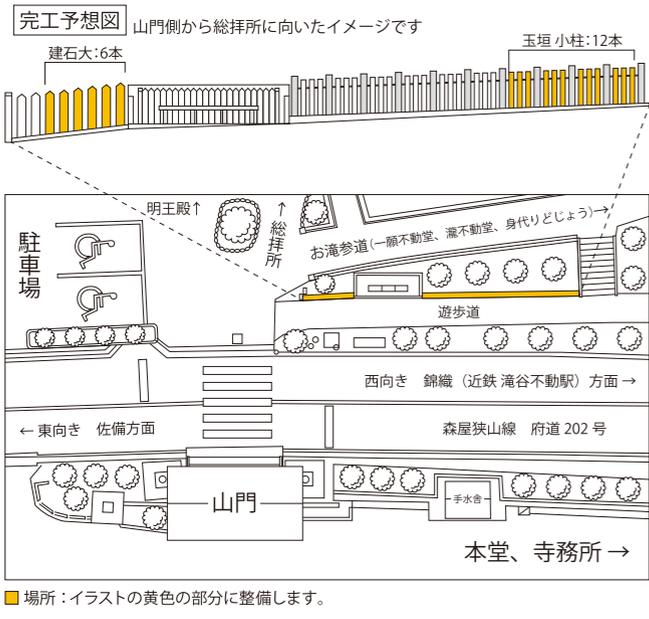


【山内整備事業】

玉垣ご寄進のお願い

瀧谷山では、開創一千二百年記念事業に引き続き、山内の整備に取り組んでおります。その一環として境内の建石・玉垣の工事を進めており、既に寄進いただきました方にはご案内いたしました通り、工事終了しております。この度、さらにその続きに、次のようにお施主様をお募りいたします。詳細は寺務所までお問い合わせください。

- 建石(大) 三〇〇万円………六体
 - 玉垣小柱 三十五万円………十二体
- ※玉垣親柱は予定数に達したため締め切りました。ご了承ください。



献石事業 寄進者御芳名 (敬称略順不同)

- 建石(大)
 - 堺市 八尾市
 - 富田林市 豊中市
- 玉垣 親柱
 - 富田林市 柏原市
 - 堺市 和泉市
 - 堺市 大阪府
 - 富田林市 河内長野市
- 玉垣 小柱
 - 堺市 京都府
 - 大阪府 藤井寺市
 - 富田林市 富田林市
 - 堺市 三重県

銘板設置のお知らせ

開創一千二百年祈念 事務棟・客殿棟建立に際して、多くの皆様よりご寄進ならびに仏具・備品のご奉納をいただきましたこと、あらためまして厚く御礼申し上げます。

ご寄進・ご奉納くださった皆様のお名前をまとめて「開創一千二百年祈念 事務棟・客殿棟建立 篤志寄進者御芳名 仏具奉納者御芳名」として寺務所ホール内に掲げさせていただきました。ご参詣の折にご覧ください。

先日、ご住職が調べ物をしていたところ、古書店が販売していた写真に目が留まりました。どこか見覚えがあるような古い写真に目を凝らすと、そこにはまぎれもない瀧谷山の本堂と、その下には「河内國瀧谷山明王寺全景」という文字が印刷されているではありませんか。どうやら瀧谷山の絵葉書シリーズのようです。早速取り寄せて、よくよく眺めてみると...

開創一千二百年記念の大改修にて建て替わる前の庫裡や客殿はもちろん、車のご祈祷でおなじみの法楽殿が建てられる以前の境内の様子も映っています。本堂の左手に白い漆喰壁の霊牌堂が見えていた往時の瀧谷山の様子を臆気ながらも憶えている方もおられるのではないのでしょうか？ 現在はうっそうとした照葉樹の森になっている境内背後の山の鎮守稲荷社あたりにお堂が建っていることも見て取れます。また西の山の上から松林越しに撮影した写真では、現在よりもたくさんのお堂が建っている様子が窺えます。さらに別の写真では手前に茅葺の建物も映っています。現在の鐘楼堂の左手には幅の広い石段が本堂に向かって上がっていく形になっており、現在とは少し様子

の異なるかつての瀧谷山の姿に、寺内一同、息をのんで見入りました。先代住職、實善老僧の筆による『瀧谷山史考』を紐解くと、明治末期から大正にかけて信道老僧の時代に瀧谷山の境内および建物がたくさん整備された、とあります。明治四十一年に現在の鎮守稲荷社のあるあたりに狭山北条家の仏堂を移築して奥の院が建立されたという事は、一枚目の写真に見られる



奥の院 瀧谷山 本堂 実善老僧筆

本堂背後西にあるお堂は、この奥の院として建てられたものでしょう。このお堂は後に山城の蟹満寺に観音堂として移築されています。翌明治四十二年には、享保年間（一七二六〜一七三六年）に建てられた参籠堂を女子参籠堂として整備し、新たに

男子参籠堂を新築したということ。二枚目の写真の松林の下に並ぶお堂は、この参籠堂でしょうか。



参籠堂 瀧谷山 実善老僧筆

鐘楼堂が泉州菱木の神社より移築され落慶したのが大正二年、霊牌堂の新築が大正三年、さらに奥殿基礎工事着工が大正十四年、落慶が昭和三年ですから、鐘楼堂も霊牌堂もあり、本堂奥殿もすでに整備されていることを見ると、この写真自体はそれ以降に撮影されたものであるはず。一方で、三枚目の写真左隅に見える本堂にまっすぐ向かう幅の広い石段は、昭和十一年の府道改修工事の際に削り取られてしま

いますので、この写真は昭和三年から昭和十一年までの間に撮影されたものであることがわかります。



瀧谷山 実善老僧筆

本堂奥殿完成を機に信道老僧は隠退され、あらたな住職として實乗老僧が、土佐の五台山から瀧谷山へと、大勢の幼いお弟子さんを連れて赴任されたのが、ちょうどこの時期です。世相は徐々にキナ臭くなってゆく時代ですが、若き日の實乗老僧は、さあ瀧谷山をこれからどうしていこうか、という気概に満ちていたことが想像されます。實乗老僧は、まずは瀧谷山の風景を写真に収め、絵葉書にして広めようとしたのかもしれない。お弟子のひとりであった先代・實善老僧は、生まれが大正五年ですから当時はまだ十二〜十三歳、やんちゃ盛りの少年僧です。そんな實善少年の目には、瀧谷山はどう映ったのでしょうか？

お寺のごはん

12 雷みそ

節分の煎り豆を使ってひと品。

「雷みそ」とはまたユニークな名前と思われるかもしれませんが、名付けられたのは先々代の老僧さまで。節分の煎り豆に赤みそをかためたものですが、食べると口の中で煎り豆がバリバリと大きな音を立てるので、「これは雷みそだ」というわけです。

先々代の老僧さまは愛知県のお生まれでしたので、岡崎の八丁味噌がお好みでした。この「雷みそ」も八丁味噌をつかいます。



材 料 ●節分の煎り豆 ●八丁味噌 ●砂糖 ●ごま油

作り方

- お鍋にごま油をたっぷり引いて豆を煎ります。全体に油をよくなじませて、味噌を入れてもしんなりしないくらいにカリカリに煎ります。
- ごま油の良い香りがしてきたら、八丁味噌と砂糖を入れます。水分は入れません。煎り豆の分量に対して十分の一くらいの少量の味噌で結構です。
- 砂糖が馴染んで照りがついて、お味噌が煎り豆全体にからむと出来上がりです。

瀧谷山の四季 ④

空の色に春を感じられるようになってきました。陽がどんどん長くなって、気持ちも活動的になってきますね。お釈迦様の生誕祭を迎えるころには、境内の周囲の山には花が咲き乱れます。黄色い花から順番に咲き始め、続いて白やピンクの花が咲き、やがて濃い紅や紫から青い花へと移

ろってゆきます。山内も春季大祭準備に忙しく、活気のある季節となります。

忙しく慌ただしい状態が続くと、呼吸が浅くなりがちです。正座や安座で背筋を伸ばして座り、まず軽く呼吸を整えます。それから、改めていいねいに息を吸い込み、ゆっくりと最後まで息を吐きます。その呼吸のリズムに意識を向けて、しばらく繰り返し

ていると、だんだんと落ち着いてくるので、気持ちも軽くなります。春は足先や足首が冷えやすい時期でもあります。足先から足の裏、足首、ふくらはぎと順番にもみほぐしましょう。吐く息、吸う息に



合わせて手を動かすと、やがて身体がポカポカしてきます。最後は立ち上がって、腕を左右にゆったり振りながら、また呼吸を整えます。このように、毎日軽い運動をして身体を整えていると、忙しさを慌ただしさに流されないようになります。

自分の身体に向き合っていると四季の移り変わりもよりよく感じられるようになってきます。この春も健やかに過ごせるよう、あたたかい陽光を浴びに是非お参りください。